



## 素粒子物理学実験の現場から

第39回

大阪大学 花垣 和則

## 新博士の誕生

私が現職に就いたのが2006年の10月。早いもので7年近くも大学教員として過ごしていることとなります。私が属する研究グループではLHCでのATLAS実験をやっていたなかったので、学生もスタッフも誰もいない状態からの研究スタートでした。半年後の2007年4月からは、修士課程1年の学生2人が私の実験をやることになり、さらにその数ヶ月後には、獲得した外部資金で博士研究員を雇い始め、小さいなりにようやく研究グループの体をなすようになりました。その後、毎年1人が2人の修士課程の学生が私のグループにやってきて、また、毎年1人程度は博士課程に進学してしまっていて、今では私も含めると総勢10名の研究グループとなりました。

その研究グループから、初の博士が生まれました。私が指導する最初の学生、つまり2007年4月に修士課程1年としてATLASの研究を始めた学生が、今年度の初めに見事博士となることができました。修士課程時代から含めると6年と少しの間の努力が報われたわけで、私としても感無量です。博士課程は3年間のコースですが(修士課程は2年間)、素粒子物理の分野では1年少しの延長で博士になれるというのは、概ね順調と言えます。

しかし、一言で博士と言っても、その基準は千差万別です。大学によっても基準は違いますし、指導教員によっても大きく基準が異なります。博士審査というのは、どこの大学でも通常5人以上の審査員によって行われるのですが、博士論文のクオリティを一番左右するのはやはり指導教員です。厳しい人とそうでない人では要求するレベルが段違いで、同じ大学で博士を取得したと言っても、内容的には月とスッポンということが非常によくあります。

私はというと、非常に厳しい指導教員だったので、今回の学生が4年以上かかったのも一重に私の要求が厳しかったからです。が、その厳しい要求に応えて立派な論文を仕上げてくれたので、その論文は誰にでも胸を張ってみせられるものとなりました。自分の愛弟子の成長が目に見える形となり、新博士誕生を心から喜んでいます。



著者紹介 花垣 和則(はながき かずのり)

大阪大学大学院理学研究科 准教授

CERNでLHC実験に参加